

第4節 神於山における課題

1. 放置竹林の拡大

神於山の竹林は、図 1-11 で示すとおり非常な速さで年々拡大している。

放置竹林（人間による適正な管理がなされなくなった竹林）の拡大による最も大きな課題は、個々の立竹の高い生殖能力のもとに、他の植生域まで侵入、拡大し、他の植生域の上層木を被圧し、枯死に至らしめることにある。

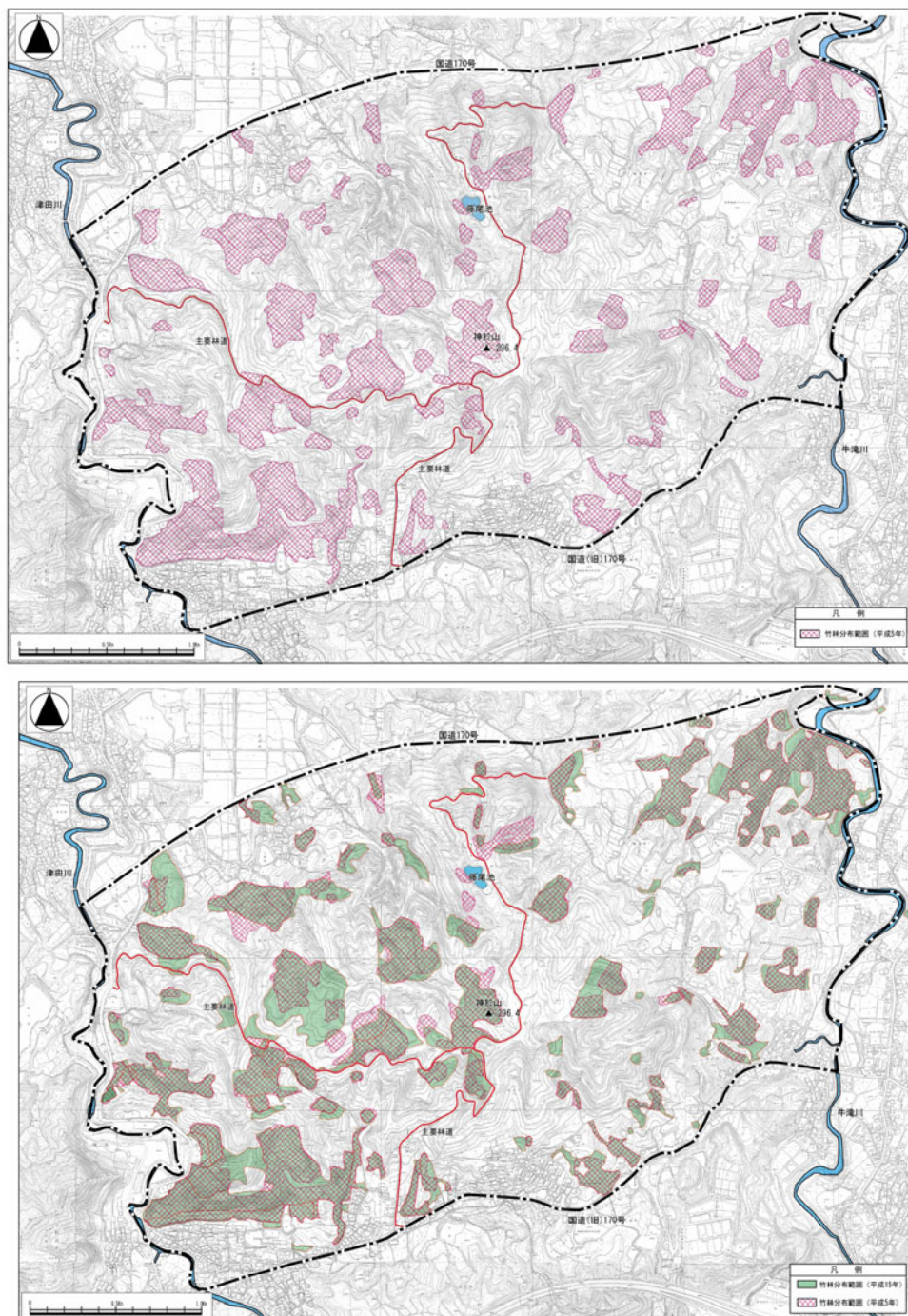


図 1-11 平成5年と15年の竹林の分布変遷 神於山植生調査業務（現況編）岸和田市 2004/03

竹は、地下茎を伸ばして周囲の森林に侵入し、日光が届かない暗い森林であっても短期間のうちにタケノコを伸張させ上層に枝葉を広げ光合成する能力がある。

また、一般に他の高木の植生と共生しない。

放置竹林内では、過密で枯れたり折れたりした竹棹が放置されたままの粗悪な状態となっている。このまま放置すれば中下層の多様な植生が消滅していくおそれがある。

このことは、様々な生物の生育・生息空間を奪い、里山の有する豊かな生物多様性の低下をまねくことになる。また、成立土壌の劣化や乾燥化が進むことになる。

さらに林縁部ではササ類やクズの繁茂により荒れた印象を与えているなど、健全な樹林が有する生物多様性保持機能、景観機能が損なわれているので、樹種転換や竹林の適正管理を検討する。

2. 防災や水源涵養機能の低下

神於山は風化の著しい花崗岩類が広く展開しており、地力も劣っている。また、生産性が中庸もしくは低い土壌からなっているため、土壌の成熟化を促進するような樹林改良と土壌の崩落を招かないような措置を検討する。

現在、神於山をその源とする轟川・春木川の水量が過去に比べ、極端に少なくなっており、毎年、生息しているフナ類やコイが酸欠で壊死している。

河川の水量が少なくなっている原因は、いろいろ考えられるが、一つには神於山に対する人為的な働きかけが減少し、神於山での松林が枯れ、竹林の拡大に伴って、以前はあった神於山での湧水が枯れたり、河川の水量が減少する等の報告がある。

保水能力の少ない竹林を樹林改良するなど、森林の適正な管理を行い、神於山での水源涵養機能を高めるよう検討する。

3. 歴史・文化的側面の希薄化

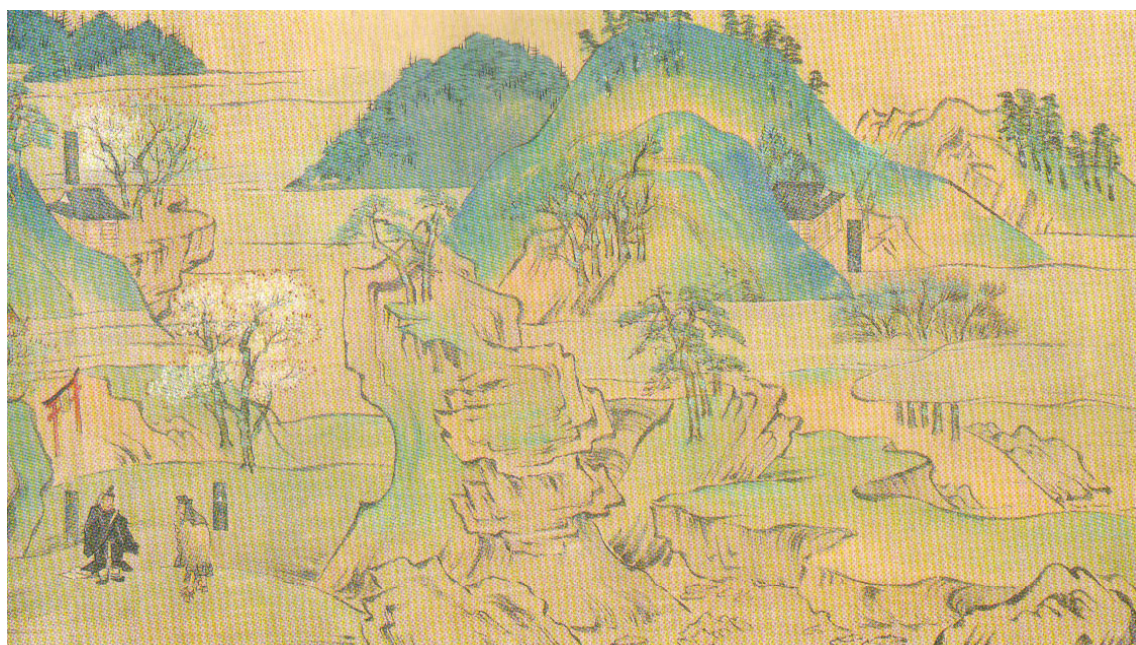
自然再生区域は、古くから何らかの人為の係わりがみられ、かつ係わりの程度も大きく、山裾では歴史ある社寺仏閣などが点在している。

しかし、現状では、神於山と人為の係わりが希薄になり、それに伴い歴史・文化要素資源との係わりも薄れている。そこで、神於山周辺に点在する歴史・文化資源を繋ぐ（印象づける）樹林整備を実施し、多くの市民が参加する里山づくりを検討する。

自生種のサクラなどの修景植栽を行った山裾整備を実施したり、ウバメガシ、マツ、スギ、サクラなどの名称のついた地蔵が多くみられることから、地蔵名に由来のある樹木を植栽するなど、訪れる人々に歴史資源の再生とともに緑の印象が深まるような整備を検討する。

また、神於寺周辺を、これら歴史・文化資源の拠点として位置づけ、境内にある既存

モミジ林の育成を図ることにより、歴史や紅葉の名所として情報発信されることが望まれる。



神 於 寺 縁 起 絵 巻